

法人全体から見た課題

障害者福祉の不正受給は、平成30年度では8億円を超え、平成31年(令和元年)では6億円にも上り、14年度以降の6年間で30億円を超えている。指導監査担当の職員の経験不足や人員不足もあり、明らかになっている額は、氷山の一角ともいわれている。不正受給で処分を受ける職種は、障害児向けデイサービスが多く、処分対象の役7割が株式会社などの営利法人だった。

社会福祉法人ポレポレでは、地域に貢献する社会福祉法人の役割を強く自覚し歩みを進めている。令和元年度は、「みんなの笑顔が見たいから、お互いの違いを認め、尊重し合い、支え支えられる共生社会の実現を目指す」という法人の理念に加え、平成29年度の障害者白書がいう「障害者が地域で暮らしていくうえでの毎日の暮らし、1週間の暮らし、1年間の生活リズム、そして生涯の各年齢段階に通常経験する生活体験が障害者の人々に保障されているか」というと、わが国では、いまだ道遠し」と指摘するその考え方に立ち、各事業所が、日々の支援にあたることを目標とし、事業を進めてきた。

1 活動報告と成果

- ① 各事業所の定員確保は、保護者の信頼を受けているバロメーターとして、また、事業所の充足や環境整備などに関係する経営とも直結する重要な活動です。放課後等デイサービス「げんき」では、相談支援センターに足を運び、紹介を訴えるという行動を継続的に行った。その結果、当初定員確保に見込みが低かった中でも利用者が増えた。常に意識して、しかも継続しての行動に学ぶものがあった。
- ② 社会福祉法人の役割の大きなものに、「地域への貢献」がある。貢献することで、障害者も街の方々のお役に立つことができるという考え方である
- ③ ●生活介護事業所ハーモニーでは、地域との共生をめざし、「マルシェ」を開催した。他の福祉施設や地域の団体、就労継続支援B型事業所ポレポレハウスの参加があり、放課後等デイサービスのメンバーもお客で楽しむ等、連携を作った。主催のハーモニー職員が「楽しかった」という評価をし、年間で3回ほど行う意欲を見せたが、新型コロナウイルスの感染拡大が起こり、休止となってしまった。
●「楽しもう・つながろう・一人一人が主人公」というテーマで「ポレポレまつり」を開催した。将来は、地域共生をめざすが、令和2年度においては、まずは、組織内の仲間と職員と保護者が楽しむことを目的として若手の職員が実行委員会を作り運営をした。
● 障害のある人々やその保護者が家にこもりがちで街の人々に交わることをためらう傾向がみられる。障害者が地域で理解され、幸せに生きようと地域共生を目的とする法人の理念を発信してきたNPO法人なかまの家の活動を支えた。「第13回、ともまなびセミナー…まちを学校に:おもしろ体験子屋」では、特に障害者への参加を訴え、例年より多い障がい者の参加があった。当日は、高齢者・子ども・大人・障害のある方々が年齢を超え、違いを超えて1200名を超える参加者があった。「障がいの人々が怖がらずに街にとけこんでほしい、多くの人々に実体験のすばらしさを伝えたい、講師の方に人につたえることを楽しんでいただきたい」との理念が少しずつ街に根付き始めてきた。
- ④ 国の食品基準として令和2年6月にハザップの導入が法制化されることとなった。食品づくりを主の作業としている就労継続支援B型事業所ポレポレハウスは、現在の環境下で、製造過程・製造環境・食品管理等について、管理栄養士資格を持つ職員の力を借りて、指導を受けながら、できる範囲での改善に取り組んだ。

- ⑤ 職員研修は、法人の最も重要な視点です。令和元年度は、法人の全体研修を2回開催した。第1回のテーマは、「丸ごと受け止める」とし、「夜明け前」の映画の上映とNPO法人なかよしの小山理事長の講演を受けた。精神障害の人々の歴史とそこから見える障害者理解・障害福祉に携わる者の姿勢等を学ぶことができた。第2回の研修では、「各事業所の実践から学ぶ」をテーマに30分のパワーポイントでの発表をすることとなった。各事業所とも準備をしたが、新型コロナウイルスの感染防止のため、2月29日(土)開催の予定をやむなく中止した。今回は、各事業所が実践をまとめる過程を大切にすることとした。70名の職員中60名に近い参加者を見込んでおり、研修への参加意識の向上が見られた。
- ⑥ 働く条件の整備については、出産する職員2名の産休に関する諸規定も規則に則り行うことができた。女性が働く環境の整備として、今後の法人の糧となった。新型コロナウイルスの感染拡大防止のひとつとして、免疫力を高めるために、極力残業をしないようにし、健康を守る働き方を自助努力で見つめることとした。その中で、やりきれない仕事の内容も見えたことが今後の職場改善につなぐために有意義となった。
- ⑦ 共同生活支援事業所なしの木ホームでは、「障がいの人々が街の中で理解されること、街の方々に力を借りて生きること」が形となって表れた。開所して2年、管理者サービス管理責任者以外はほとんどの職員が障害者支援に携わったことのない街の方々に構成された。障害者を育てた一人のキーパーソンの職員の存在が大きく、支援の内容を深めていくことができた。職員は、障害者とのかわりの中で、自分自身が学ぶことができるとして、真摯で誠実な仕事をしている。
- ⑧ 平成22年に社会福祉法人を設立して10年になる。この機会に支援の内容をまとめ、検証し、次の指針づくりに生かすために「パンフレット:みんなの笑顔が見たいから」を作成した。外部への宣伝として使うことができるようになった。

2 見えてきた課題

- ① 個別支援計画作成は、利用者一人一人へのきめの細かい支援提供の基本となるが、放課後等デイサービスにおいては時間をかけて討論されている。しかし、就労と生活介護の2事業所においては職員体制の問題や、日中活動支援の余裕のなさの中、作成の大変さが継続している。職員の思いを優先するような支援に陥ることなく、「利用者や、親の願いに応える支援」のためには、サービス管理責任者が作成を最優先にして業務にあたることできるように、事業所全体で業務の改善を見つめる必要がある。
- ② 定員の確保は、職員の願いになってはいるものの、行動化できているとは言えない。法人の存続には欠かすことのできない課題でもあるが、達成されていません。利用者には選ばれる魅力ある事業所づくりを進めながら、確保の方法や活動を、法人全体の運営会議に組織として強く位置づけて進めたい。
- ③ 法人の第二期10か年計画の作成は、法人内で提案できるまでに煮詰まっはてはない。ポレポレの歴史を振り返り、そこから学んだことを確認し、法人の今後の指針を出し、そのうえで10か年計画を作成する必要がある。
- ④ 父母との提携は、なかなか進まない。父母との提携の意義は、親の願いを直に聞くことができることであり、利用者一人一人の幸せな人生を父母と共有し、法人と共に力を合わせて作り上げていくことにあるが、いまだ歩みをつくることができていない。「親の会」の活動継続が突破口になるような創造的なつながりの活動を作り出したい。
- ⑤ 第2期10か年計画が決まらない中で、資金作りが進まなかった。10か年計画は、地域に貢献をする社会福祉法人の責務として進めていくものであるが、その根底となるものは地域の障害者のニーズに応えるという姿勢である。10か年計画を保護者・地域の人々に賛同を受けながら、資金作りを

進めていく必要がある。親の会との連携も強化したい。

- ⑥ 職員のスキルアップは、障がいの方々の日々の幸せと大きくかかわっている。当法人において、障害者理解と寄り添いは、まだまだ追及していかなければならない。職員自らが主体的に研鑽に励むことができるような組織になることで、スキルアップを更にめざす必要がある
- ⑦ 地域共生の活動のひとつとしてNPO法人なかまの家が進めている「おもしろ体験子屋」への法人としての共催は、今後も継続していく必要があるが、障害者や、その家族がI市民として参加できるように更に宣伝を強めたい。NPO法人の理念である「ボランティア」で支えていこうとする職員を募りながら進めたい。
- ⑧ 障害者権利条約でも提唱している、文化・芸術を、障害者は、なかなかその機会に触れることができない。特に、大人になるほどにその機会がなくなっている。文化・芸術の重要性を職員自ら体現するような活動を生み出しながら、この課題を見つめていきたい。

就労継続支援B型事業所 ポレポレハウス

1.利用者状況

(定員 20人)

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
開所日数	21	20	22	23	18	22	23	20	21	20	21	21	252
延利用者数	303	281	301	326	260	315	309	284	304	295	277	294	3549
1日平均数	14.4	14.1	13.7	14.2	14.4	14.3	13.4	14.2	14.5	14.8	13.2	14	14.1

(1日平均利用者数 14.1人)

2.活動報告

①視覚化支援

・昨年に引き続き、ホワイトボードを活用し、1日の作業の流れが分かるように提示して自主的に作業に取り組めるようにした。

②作業内容

・内職作業に落ち着いて取り組むことができ、慣れて来たことで取り組む作業数量を発注元に依頼し増やしてもらった。

・焼きそば班の作業が構造化(視覚的にわかりやすくシステム化)できていることで、利用者が迷わずに作業に取り組めるようになってきた。

③地域イベントの活用

・地域のお祭り、イベントでの販売活動にこれまで以上に重点を置き、日常で達成できない収益分を補った上、さらに売上を伸ばすことができた。

④利用者が主人公になるために

・一時的に物置となっていた4号店の1階部分の利用の仕方について、利用者で話し合ってもらい、『お昼の休憩場所』として活用することに決定し、その場所を清掃・壁のペンキ塗り・整理整頓まで主体的に決めたことに従って、実際に取り組んでもらった。

⑤社会人研修

・社会福祉協議会から招待を受けた『木下大サーカスの観賞会』や『フライト・オブ・ドリームス』(中部国際空港)への社会人研修を実施し、公共の場での過ごし方や日頃とは違う利用者・職員間の交流を図ることができた。

3.成果

◦「主人公は利用者である」を原点とした支援を心掛け、作業内容のやり方を再確認しながら、準備や作業に利用者が進んで取り組めるような環境をつくり出せた。

また、支援員が支援するための声掛けを意識的に減らすことで、利用者同士が互いの作業を助け合う姿がみられるようになってきた。

◦内職作業を協成産業からのスラブ(スポンジ)に両面テープを治具(型)に合わせて貼る作業のみにしたことで、利用者にとってわかりやすく、集中してやれるようになり、作業量も増えた。

◦販売においては、日常の移動販売や路上販売だけでは売上が伸び悩み、地域のお祭りやイベントで販売数量を強気で攻めたことにより、目標を達成することができた。

◦農作業では、ネギの種まきから始め、苗植え、収穫を利用者が楽しんで取り組むことができた。

また、収穫したものはお好み焼きの材料として使うことができた。

◦以前は支援者が仲介することで、利用者同士のコミュニケーションを促していたが、なかま会議で自分の意見を言ったり、帰りの会で今日の取り組んだ仕事を報告し合ったりすることで、利用者同士でも少しずつ適切なコミュニケーションが取れるようになってきた

4.見えてきた課題

◦利用者の生活環境や生活習慣が安定しているかどうかで、就労の場での取り組む姿勢が大きく影響されるため、利用者のニーズを把握しつつ、家庭や他事業所、行政などと連携を図り、良好な日常生活が送れるように働きかけているが、即、改善できるものばかりではないので、支援をしても難しい場面が多くみられる。

◦職員がこの数年定着しておらず、職員の入れ替わりがあることで、作業の支援内容を深めることが難しく、職員定着が図れるような職場内の交流や改善を促す取り組みが必要である。

◦現状での作業内容や販売の仕方では、今の工賃を維持するのが精一杯で、目標工賃を掲げて拡大を促してきたことで、職員が疲弊してきている。

◦「楽しく仕事をしながら、社会の役に立つ」をコンセプトに支援をすることと、利用者工賃の向上を目指しながら就労支援をすることが、今の手法では両立できていない。

◦定員を確保する上で、利用者の送迎サービスが必須条件であることが見えてきており、早急に送迎体制を確立する必要がある。

1.利用者状況（定員 20人）

1日平均利用者数 20人

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
開所日数	20	21	20	23	18	21	23	21	21	20	21	22	251
延利用者数	403	403	412	447	340	401	424	398	386	383	380	406	4783
平均(人)	22	21	21	20	20	20	19	19	19	20	19	19	20

※10月 精神障害の方が1名、ポレポレハウスへ移籍。

※12月 1名、体調不良で入院。

※2月3月、新型コロナ対応による。

[障害別利用者数]

障害種別	知的障害（自閉症含む）	精神障害	身体障害	若年性痴呆	合計
利用者数(人)	19	3	1	1	24

※ 令和2年3月31日現在 登録者数 24人

※ 精神障害の方の安定した通所を促す施設環境が提示できない場合、その支援は難しいと考える。

2. 活動報告

①利用者の作業から生み出される商品づくり。

・各班ごとの作業内容も利用者各々ができる事を中心に整え、なるべく商品化できるように工夫してきた。パッケージにも工夫をくわえ、障害者が作った事を意識させない、商品そのものに価値を見出せる商品作りをめざしている。

・販売は、イベント時と喫茶のコーナー販売が主でいずれもスペースが確保できないことから、なかなか利用者の販売参加が実現できていないのが残念である。

②行事や余暇活動を行ない、作業以外の場面でも楽しく過ごす。

・いろいろな障害特性を持っている利用者が一緒に楽しく過ごすことは難しいためその時々で楽しく過ごせる工夫を行なった。利用者が少ない営業日には、1つの部屋に集まり、みんなで『歌って、踊って、ダンス・ダンス』を楽しんだり、映画の鑑賞会をしたり。少人数であれば意外と楽しめることが実証できた。普段の休憩時間においても、一人の時間を楽しむ人もいれば、職員と一緒に本を見たり、ゲームをして他者との関わりを楽しむ人もいる。

・『ハーモニーマルシェ』開催。利用者、職員、保護者で『楽しい』を実現。同業の他事業所とも連携をし、地域の方たちと触れ合う機会をもった。今後も毎年企画していき、地域の方たちとの交流の場を築いていきたい。

③『四季の里』の「共生の庭」を整備し活用する。

・常に草刈りや石ひろいを行ない、利用者がのびのびと過ごせる環境を整えている。特に、園芸班では、季節の野菜を植えて育て、その都度新鮮な野菜を収穫するという貴重な体験を行なっている。今期は育てたさつまいもを使って、ハーモニーマルシェに来てくれたお客様に焼き芋をふるまった。もう少し、畑を増やしたいと思うが、土がとて固く、畑づくりに適していないため、とても時間がかかる。

- ・3月以降、気候も良くなり、桜やラベンダー、去年のこぼれた種から可愛らしい花々が咲きはじめ『四季の里』の「共生の庭」もほんわか春色になると、気分転換に外活動の時間が増えてくる。ベンチの上でごろんと横になっていると、室内でイライラしていた利用者もいつの間にか機嫌が直ってしまう。座りっぱなしの体をほぐすために、みんなで庭に出て散歩したり、ボール遊びをしたり、「だるまさんが転んだ」を思いっきり楽しんだりしている。

新緑の若葉が風に揺れとてもさわやかなリラックス空間となっている。

④新型コロナ感染症への対応

- ・1月の終わりよりハーモニー内で新型コロナ感染症対策に注視し、看護師を中心に、検温、手洗い、手指消毒、施設内消毒、換気、マスク着用を徹底し、利用者の健康観察を重視した。
- ・3月より喫茶の自粛休業。そのため、販売がストップ。喫茶営業が再開されなければ授産収入は得られず、利用者の工賃が支払えなくなってしまう。要検討。
- ・送迎を家族送迎でお願いをする。そのため、通所自粛を選択された利用者が1名。本人に対する日常を思うと1ヶ月の自粛(やすみ)には疑問が残る。

3. 成果

- ・これまで行っていた送迎を新型コロナ感染症対応で保護者送迎にしたため、職員の業務に余裕ができ、ミーティングの時間をこれまでより多く取ることができた。利用者一人ひとりの困りごとに寄り添い、どうしたらそれを改善できるか、チームワークで支援検討する等、とても有効な時間となった。
- ・芝ざくら『ポレポレ』の完成。コロナ、コロナ、で殺伐とした社会情勢の中、地域に明るい話題を提供できた。夕方、芝ざくらを植えていると散歩をしている人たちから「何をしているのですか」「きれいになりますね」「楽しみにしていますよ」と声をかけていただいた。来年の春には、ピンクのじゅうたんに、白くポレポレが浮かび上がるはず。四季の里『共生の庭』がさらににぎやかになる予定。
- ・喫茶休業のため、放デイと連携。放デイの子たちの買い物体験を企画。今回は、急な企画であったためスタッフのみの対応であったが、今後は、ハーモニーの利用者に店番してもらうなど、ハーモニーの利用者にとっても販売体験になる様に段取りをしていきたい。
- ・テイクアウトによるランチ販売試行。コロナ対策ではあるが、今後の喫茶販売の1つとして検討していきたい。

4. 見えてきた課題

①送迎車の確保

- ・キャラバン2台が古くなって故障が増えてきたこと。
- ・利用者増に対する対応のため。

②月に8万円の授産収入の確保と作業の構築

- ・現状の作業は主に『紙すき』と『on-Rバッグ』『園芸』。喫茶の一角での販売と年に数回のイベント販売に頼っているため、喫茶営業ができないと授産収入は大幅減少。工賃が支払えなくなってしまう。喫茶以外の場所での販売を考える。

③常勤職員の確保(1名)

- ・管理職とサビ管職の兼務は難しい。サビ管業務を充実することで利用者支援を深め、利用者一人ひとりのサポートをしっかりと行うことができる。

④駐車場の不足

- ・ハーモニー・なしのきホーム職員の駐車場の不足

共同生活援助事業 なしの木ホーム

1、利用状況

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
開所日数	27	27	24	27	27	25	26	25	24	23	24	25	304
延利用者数	148	151	141	159	139	145	154	149	129	134	144	149	1742
平均延べ利用日数	25	25.4	23.6	26.6	23.7	24.3	25.7	24.3	21.3	22.4	24.0	24.9	291.2
平均(人)	5.4	5.5	5.8	5.8	5.1	5.8	5.9	5.9	5.3	5.8	6	5.9	5.7

2、活動報告

- ・ ホームの理念の「施設化しない」ということが「一人一人の個性をとらえてその人らしい生活を応援する」という個別支援となり、職員が6人の個性をとらえ、6人6様の細かい支援を行ってきた。
- ・ 6人6様の暮らしの支援を可能にするために、職員が月1回の職員会議で、個別の支援の具体的な方法や困りごと(入浴の仕方や、服薬の方法、行動が止まった時の声のかけ方等々)、を話し合い、共有に努める努力を積極的に行ってきた。月1回の職員会議ではまだまだ不明確な点や、深めなくてはならない点について職員の代表でつくるコア会議を随時開催し、支援の共有や、運営の改善を進めてきた。勤務時間外に自主的に集まり支援の共有のために交流する職員の主体的で献身的・聖職者的な動きもあったことを記したい。
- ・ 全介助の入居者の方の病気に対しての緊急対応・服薬支援・入浴支援・病院受診で職員からの支援への不安が出たことにより、愛知国際病院からのホームへの訪問診察・折戸病院の訪問リハビリ・ドラッグプラスとの契約による薬の配達につながることができ、不安の減少になった。これからのホーム入居者の健康問題の支援事例としても大きな成果となった。入浴時に浴槽に入ることへの支援の危険に関して、福祉器具を使用することで危険を減少させることができた。
- ・ 自立生活の基本である「自分のことは自分でする」ということを見つめた。自宅での生活では親にやってもらっていたことの中で、自分でできることを無理なく緩やかにそして、はじめは職員と一緒にやって応援をした。
- ・ 楽しい暮らしを応援したいという職員の思いが「買い物」「散歩」という活動に一人支援体制時間にすることで、入所者の余暇への支援体制を保障したいという職員の努力が見られた。
- ・ 一人一人が共同生活を安定して行うために生活のなかでの生きづらさを一人一人が発信することを応援した。耳を傾け、相談に乗ることで、共有の生活ルールが出来ることが多くあった。
- ・ 「ホームの1年10か月」というまとめを30分のパワーポイントのまとめ、一部の親に見ていただいた。感謝の言葉が職員に届いた。

3、成果

1 自立した生活ができる範囲が広がってきた(3人の女子の生活力の広がり)

- ・ 部屋の掃除、洗濯(衣服・シーツ・枕カバー)と洗濯干し、風呂当番をつくり入浴(器具の使用で湯船に湯を入れる)
- ・ 朝食の手伝い(パンの準備)
- ・ 夕食の料理の手伝い
- ・ 月1回、夕食づくりがしたいという要望に応じて、夕食づくりを支援

- ・ 毎週火曜日の夜2名の女子入居者がお弁当を作ることになり、食材の確保も含め支援をしている。

2 全員で行うようになった生活

全員(全介助1名除く)が食後に食器の片づけする。女子2名が食器の片づけをするようになる。半介助の人も食後の机ふき、フロアの床掃除をする。全介助の人がそれを見て、自分の席の机をふくことを自らするようになった。

3 「楽しいことをしたい」に応えることのできる体制を作った。

月1~2回お料理を作る(女子2人)毎週火曜日にお弁当を作る(女子2人)散歩がしたい(女子1人男子1人)買い物に行きたい(女子1人)との希望が出て支援が始まった。この生活を応援する為に、朝7時から10時まで世話人と生活支援員が2人の体制で支援に入っていたのを生活支援員が1人で担当し、世話人は時間をずらして支援に入るという体制に改善した。

4 障害児を育てた職員の障害者理解とその実践がホームの支援内容を深める大きな力となった。又その力を受け入れ、共有しようとする成熟した職員集団があったことも、ホームの支援内容を深め、自立生活を支えることとなった。

5 医療連携が一步進む

愛知国際病院の医療連携室と契約をするとホームへの訪問診察を受けることができ、薬もドラッグとの契約でホームへの配達が可能となった。おりど病院との契約で、訪問リハビリも可能となった。

「親の不安は、病気の時にどうなるのか、職員の不安は、病気の時の対応が困る」この二つの不安に少しだけ方向が見えてきた。

6 相談支援センターとの連携で、入浴の際に安全に入浴できるための福祉用具を補助金を受けて購入することができた。この支援の体験も今後の糧となった。

7 職員の支援の共有が一步一步進む

一人一人の支援に対する具体的方法や記録書類等が職員の自発的な発案により深められ、働きやすい職場づくりに取り組んだ。

4 見えてきた課題

- ・ 10パーセントの消費税の値上がりや、運営の厳しさから家賃・生活費等の妥当な利用料の見直しが迫られている。
- ・ 地域連携医療の強化で病気に対する家族の安心への支援強化を拡大する。
- ・ 土・日・祝の開所をめざす。(月1回から進める)そのための体制づくりをする。
- ・ 土・日・祝の開所に伴い、ホームの職員配置がない時間の過ごし方を相談支援事業所との連携を強めながら作りあげていく。(美容院・お出かけ等、)
- ・ 管理者・サービス管理責任者、中核的な職員配置等、体制の継続的な強化をつくる。

併設型短期入所事業 チャレンジホーム

1 利用状況

令和元年の利用者 5名

(内訳 生活介護事業所ハーモニー利用者4名 支援センターからの依頼 1名)

2 活動報告

- ・ 説明会以後契約者が5名となった。女性が4名 男性が1名であったため、初めての体験であることから、親の不安をなくすため、同性介護となるよう、夜勤職員が女性である金曜日と月曜日に体験をしていただくこととなった。
- ・ 全く初対面の利用者さんを支援することは、職員の心の負担を招くこともあり、社会福祉法人ポレポレの事業所で障がい者理解をしている利用者である18歳以上の方を対象として契約をさせていただきました。
- ・ ご家族とのアセスメントをし、情報をいただきながら支援にあたった。
- ・ 利用者の不安を少しでも軽くするように、朝のうちに宿泊の部屋を見せて、荷物を置いていただき「今日はここで寝ます」と伝え、日中活動に出向いていただくなどの対応に心がけた。
- ・ 受け入れの時から 次の日の朝まで時間を追って記録をとることにより、一人一人の特徴やパターンをとらえることができ、ご家族にもコピーをお渡しして、安心してもらうことができた。
- ・ 入居者の方と食事を一緒にしたりテレビを一緒にの空間でみて過ごした人もいれば、奇声を発する人の時は、入所者さんが部屋に入ったりすることもあるなど、入居者の皆さんの受け入れが大きく影響をすることが分かった。おおむね入居者の方は、自然に受け入れているという感じがした。入居者の生活に負担をかける場面が見られた時は、短期入所の空間とホームの空間を分けるようにした。

3 成果

- ・ 食事の時間は、ホームの人と一緒にできそうであった。入浴も生活支援員の支援でおおむねできた。そのほかの時間は、個々の特徴を見て対応することができた。ほとんどの人が睡眠がとれているのを見ると不安の中にも安心して過ごせていたと思われる。このような中で世話人Aは食事指導・生活支援員は入浴支援、世話人Bは就寝の支援(慣れてくれば世話人Aのみもあり)等の支援内容が見えてきた。
- ・ チャレンジホームの受け入れが続けば、様々な問題が起こることだろうが、まずは、入居者の皆さんが穏やかに受け入れてくれたことが今後をつくることになると思うことができた。

4 見えてきた課題

- ・ ホームの支援体制が深まっていない中で、チャレンジホームの事業に遅れがあります。チャレンジホームの意義の共有とそれをどのように支えていくのかの体制づくりを進める必要があります。
- ・ ポレポレハウスとハーモニーのご父兄にホームの内容を知らせ、チャレンジホームの意義や、利用への具体的な進め方など、啓もう活動を行っていく。

地域活動支援センター わとと

1. 利用者状況 (定員17名)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
開所日数 (日)	3	3	3	2	3	3	2	3	2	3	4		31
延利用者数 (人)	47	48	43	30	48	51	27	45	27	48	60	休み	474
平均 利用者数(人)	15.6	16	14.3	15	16	17	13.5	15	13.5	16	15		15.2

※3月には新型コロナウイルス感染症対応のため営業自粛、お休みにした。

※平均利用者数 15.2 人

2. 活動内容

・毎月第1:工作、第2:外出、第3:昼食づくり、第4:音楽 というテーマで主活動を組み立て実施している。

<活動内容>

4月	春のしおりづくり	カラオケ	簡単おもち作り
5月	牧野ヶ池緑地公園	ハンバーガーを作ろう	みんなで楽しく音遊び
6月	あじさい工作	冷やし中華を作ろう	アイスクリームを作ろう
7月	七夕工作	防災センター(トヨタ)	
8月	大高緑地公園へピクニック	流しそうめん	音楽を奏でよう
9月	貼り絵工作『秋』	鬼まんじゅうを作ろう	秋の歌、みんなで歌おう
10月	牛乳パック工作	楽器を鳴らそう	
11月	写真立て作り	公園へ出かけよう	楽しく
12月	カラオケ	クリスマス会	
1月	初詣	昼食づくり	お正月遊び
2月	節分工作	昼食づくり	ハーモニーマルシェ 手作り太鼓で遊ぼう

3. 成果

・お昼の休憩時間の後は、それぞれがやりたいことをしながらゆっくり過ごしている。天気の良い日は、外に出たい意思を表出する人が多く、お気に入りのポジションで思い思いに過ごしている。また、屋内で過ごすことを選ぶ人は、職員や他利用者と折り紙やトランプなどを一緒にしたり、会話を楽しんだり、他者との関わりを求めているといえる。積極的に、活動に参加し、自分の余暇の過ごし方を楽しんでいる人が増えている。

4. 見えてきた課題

・専属の職員の配置が必要である。

日本の四季折々の行事や文化に触れる活動を企画し、楽しむ内容作りを行なっているが、準備にかかる時間を確保することが難しく、職員の負担になっている。年間を通して担当職員を決め、営業を行っているが、日常業務にプラスオンで行っている為、急なお休みなどに対応できる職員がいない。職員の報酬は、残業手当で補っているが、休日が減ってしまう点において問題が残る。このままでは事業として継続が難しくなってくるのが懸念される。

児童発達支援 なかよし

(定員6名)

1. 利用状況

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
開所日数	9	15	16	18	13	13	15	15	16	15	14	17	146
延べ利用人数	21	43	46	49	33	43	49	45	53	44	40	52	518
1日平均利用人数	2.3	2.9	2.9	2.7	2.5	3.3	3.3	3	3.3	2.9	2.9	3.1	3.5

【利用者状況】

昨年と同様、4月の時点で利用者が急激に減ることはなく始めることができるが、幼稚園・保育園へ入園する利用者が多く、幼稚園・保育園の行事が優先となるため行事が重なる月は、利用が減少する傾向がみられる。年齢が幼いので病欠が多いため、当日に利用が少ないこともある。今年度も4月から見学・体験希望(主に2歳児)があり、常に体験者を受け入れていたが、2歳児が多かったため、母子通所では待機をしてもらうことになってしまった。単独通所日は空きがあったが、利用者が来なかった。

2. 活動報告

今年度から主担任を配置して取り組んでいる。

集団を意識した活動内容を会議や朝のミーティングで話し合うことが出来ている。

四季折々の活動を行い、工作や活動に盛り込んでいった。また、子どもと保護者が一緒になって遊ぶふれ合い遊びを多く取り入れ、家庭でも出来る遊びを伝えてきた。

6月にはハイウェイオアシスに親子でモリコロパークに単独で遠足に出かけた。

保護者面談を9月に行った。

問題がある利用者に対して保護者の承諾の上、保育園や幼稚園に出向き、必要に応じて支援会議を開催し参加した。

畑で夏野菜を育て、食育に役立てた。

5月から金曜日を開所した。

3. 成果

療育や保育内容が安定してきたことで、利用者を確保出来てきている。そのため、金曜日の開所を行うことが出来た。

常勤職員を配置し、なかよしとえがおの業務分担を分けたことで、職員の動きがよくなってきた。

サービス責任者(個別支援)を専属で置くことで、個々をより把握し保護者との話し合いがスムーズに運んでいる。

4. 今後の課題

- ・利用者を確保するにあたって、えがおの多機能型施設であることでの調整が難しい。
- ・母子通所は需要が多いが、単独通所は新規が来ない。単独通所(火、水)での利用者確保
- ・職員確保をしていく。
- ・建物の老朽化

放課後等デイサービス「げんき」

(定員 10 名)

1. 利用者状況

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
開所日数	21日	20日	20日	23日	18日	22日	23日	22日	20日	20日	20日	22日	251
延利用者数	171	181	193	192	154	195	197	203	199	176	176	210	2247
1日平均数	8.1	9	9.6	8.3	8.5	8.8	8.5	9.2	9.9	8.8	8.8	9.5	8.9

(1日平均 8.9人)

【新規利用者】

新一年生 3名

【登録人数】 21名

(学年内訳) 中学1年生3名

6年生2名、5年生7名、4年生1名、3年生2名、2年生3名、1年生3名

(市内内訳) 日進市:14名みよし市:2名長久手市:3名豊田市:2名

(学校内訳) 三好特別支援学校 10名 瀬戸つばき特別支援学校 3名

市内小学校 4校 7名 三好黒笹小 1名

※新一年生の利用日数が週5日～3日利用あり、大きく利用者平均にプラスとなる。

2. 活動報告

(1) 基本方針について

- ・週間予定に沿って主活動を決め、行うことが出来ていたが、市内の小学校に通う高学年の下校時間が遅くなったことで、校外活動の公園への活動が難しくなった。
- ・夏休みよりお買い物体験を活動に取り入れ、お金の勉強やお店で買い物をする模擬体験を行った。練習を重ねて実際のお店に買い物に行く体験も行った。
- ・夏休みの活動では、例年行っている水遊びは、午前、午後と行なった。
- ・郊外体験では、低学年が多いため公共機関より車での移動が多かった。
- ・愛知牧場や水族館に出かけ、沢山の人がいる中での観覧を支援者と一緒に楽しむ体験ができた。
- ・季節折々の行事を「えがお」「デイサービスポレポレ」との合同行事で体験することができた。(焼き芋体験、クリスマス会など)
- ・なかよしえがおの畑で玉ねぎ、さつまいもの植え付け、収穫が楽しめた。

(2) 習慣カリキュラム

- ・クッキングでの調理体験では、個々で出来ることを決め、達成感と食材に触れる楽しさを伝えることが

できた。また、食べたことのないメニューが食べられるようになった。

- ・畑で取れた食材(玉ねぎ、さつまいも)で調理をする体験もできたことで、食育につながった。
- ・工作では、毎月課題を決め、利用者全員持ち帰ることができた。3月にはアルバムを製作し、一年の振り返りを利用者とし、成長を保護者に伝えることができた。
- ・運動活動では、夏にはプールを用意し、ほぼ毎日行い体力作りや身体機能運動を行った。学校のある時は、庭に鉄棒、トランポリン、平均台を出し、体を動かした。時間のある日には近くの公園に出かけた。

	クッキング	工作
4月	パフェ、クレープ	こうのぼり
5月	ステックチョコパイ、ホットドック マカロニきなこあえ、バナナヨーグルトケーキ	びよんびよん動物 あじさい貼り絵
6月	わたあめ、プリン、五平餅	でんでん太鼓
7月	フルーチェ、アイスクリームパフェ カレーパン、ピザトースト	七夕飾り
8月	焼きそば、チキンライス、カレーライス	手形スタンプアート
9月	鬼まんじゅう、スイートポテト	メリーゴーランド
10月	大学いも、玉せん、マドレーヌ	ハロウインの菓子袋
11月	白玉ぜんざい、さつまい	ストローで笛作ろう
12月	ホットドック、もちビザ	クリスマスリース
1月	ビザトースト、お雑煮、プリンアラモード	節分用ポシェット
2月	おやき、恵方巻、チョコホンデュ	紙コップお雛様
3月	焼きそば、ケーキ	アルバム作り

(3)職員体制

- ・6時間パート月～金の職員が12月退職する。
- ・12月より常勤職員が入る。
- ・12月からえがお職員が1名産休に入るため職員1名をヘルプにだす。

3. 成果

- ・非常勤職員を2名配置したことで、活動や日々の準備が安定して行うことができた。
- ・昨年同様、高学年が多くなったことで、低学年を引っ張って活動ができる。
- ・リフトアップ車両を導入できたことで、送迎がスムーズになった。
- ・情報共有を意識して話をするを日々職員が意識することで、利用者支援が統一できた。
- ・保護者への情報を多くすることで、信頼関係を築くことが出来てきている。

4. 見えてきた課題

- ・低学年と高学年との下校時間の差の問題。
- ・環境を整えていき、活動内容で利用者を分けて支援する時間がとれるようにする。
- ・保護者のニーズを拾い上げていく。
- ・高学年の男子に対しての支援にあたり、男性職員を配置していく必要がある。
- ・利用者の平均を平均10人までにする。
- ・送迎車2台が15・16万キロを超えてきているので買い替えを検討していく。

- ・国の定めた職員体制に保育士・児童指導員の有資格者という縛りがあり、職員の人員体制確保が難しい事業になってきている。
- ・昨年度からの計画しているげんきの移転計画を視野に入れ、放課後等デイサービス事業の展開を今後どうしていくか考える必要が出てきている。
- ・コロナウイルス対策で見えてきた環境問題として、体調を崩した利用者の待機場所の確保が難しい。手洗い場が狭い、少人数に分けての活動ができないなどの問題が見えてきた。

放課後等デイサービス えがお

(定員 4 名)

1. 利用状況

※木曜日はえがおのみの営業日となっている。木曜日の平均は 9 名

【新規利用者】

げんきから中学 1 年生 1 名が移籍。

7 月から中学 2 年生 1 名新規登録(入院のため、9 月から利用無し)

【登録者数】 16 名

(学年内訳) 高校 1 年: 1 名、中学 3 年: 7 名、中学 2 年: 4 名、中学 1 年: 4 名

(市内内訳) 日進市: 8 名、みよし市: 5 名、長久手市: 2 名、豊田市: 1 名

2. 活動報告

今年度も言葉遣いや社会性、実体験による経験の幅を広げることが大切にし、「子どもたちの出来た」という体験を増やしていけるように支援を行ってきた。また、将来、社会に出ていく上で、身に付けておいてほしい能力が少しでも獲得できるように個人の発達段階を見ながら、支援を行った。

活動を曜日ごとに分けて運動、工作、クッキング、アイロンビーズ、などの活動を行った。

クッキングでは、あらかじめ職員がメニューの候補を作り、子どもたちがその選択肢の中からメニューを決めて、近郊のスーパーで買い物をして食材を準備する段階にも挑戦をしてきた。買い物に行くにあたり、事前に施設内でおやつの時間を利用して実際のお金を使っての買い物体験を行い、お金を支払って、お菓子を買うという練習を行った。

集団遊びなどの友だちと一緒にいる活動を通して、友だちとの関わり方や集団での過ごし方、ルールを守ることなどを経験した。活動中の友だちとの意見の食い違いなどはなるべく子どもたちで解決出来るよう見守り、状況に応じて、介入し助言を行ってきた。長期休暇には、外食や公共機関、公共施設を利用し、お金の使い方や公共の場での過ごし方を学んだ。

保護者へ対しての支援として、送迎時に日々の些細な悩みを聞いたり、年 2 回、個別懇談の場を設けて支援についての共有理解を図った。また、事業所だけでは解決できない問題に関しては、相談支援専門員や他の事業所と連携をして解決に向けて支援を行った。

3 月からコロナウイルスの影響で学校が休校になり、イレギュラーな形で利用者を受け入れる形になった。なかよしと時間帯が被ることも多かったが、一緒に活動できる内容は一緒に行い、利用者へも負担が少ない形で活動を行うことは出来た。

3. 成果

- ・買い物体験など社会体験を多く経験出来た。社会体験を行う前に施設内で練習をしたり、当日には、買うものを絵カードを用いて伝えることで混乱なく活動を行うことが出来た。
- ・なかよしの業務分担がはっきりとして、業務がやりやすくなった。

4. 見えてきた課題

- ・施設の老朽化
- ・備品の整備(遊具、玩具、教材など)
- ・施設内の環境整備の大変さ(雑草、生垣、樹木)
- ・なかよしえがおとしての定員確保の難しさ

→今年度は、なかよしへの通所希望者が多かった。そのため、受け入れをしていきかかったが、職員が少ないことと、曜日によってえがおの利用者数が違うため、なかよしで受けたい曜日(単独であれば火水、母子は月金)に入ることが出来ず利用を待っていただくことがあった。結果利用につながらないケースが多くあった。また、なかよしで受け入れを行った利用者が来年度も利用をしていくことになると、来年度げんきから上がってくる利用者を受けられなくなるなど、調整が難しかった。複数事業所があり、学年で分けることのデメリットがみえた。そのため、少しずつ学年で分けられなくなってきており、現在ある放デイ3事業所の利用者分配の目安が曖昧になってきた。

- ・職員の確保

放課後等デイサービス デイサービスポレポレ (定員 10名)

1. 利用状況

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
開所日数	21	20	20	23	18	22	23	22	20	20	20	22	251
延利用者数	117	113	112	134	107	134	130	130	128	123	119	130	1477
1日平均利用者数	5.6	5.7	5.6	5.8	5.9	6	5.7	5.9	6.4	6.2	6	5.9	5.9

※令和2年3月31日現在

【登録人数】14名

【新規利用者】4月から2名(えがおから移籍)、5月から1名(えがおから移籍)、2月から1名

2. 活動報告

実習体験の強化

10月～2月の5か月間、毎週木曜日の作業訓練の時間に、生活介護事業所ハーモニーでの作業体験を行った。今年度は2～3人の少人数でグループ分けをし、ハーモニーで作業するグループとデイポレでアイロンビーズをするグループに分かれて作業訓練を行った。グループのメンバーはその時々で変わり、様々なメンバーで作業に取り組めるようにした。隔週でハーモニーでの作業とデイポレでの作業を行ったことで、ハーモニーでの作業に対して昨年度より「仕事をする」という意識付けができた。また、今年度はできる利用者にはPC入力作業も取り入れた。今まであまりPCを使ったことがない利用者も、ローマ字の入力練習をすると、以降はローマ字表を見ながら本の写し入力作業ができるようになった。紙

すき作業は能力を持って余して集中できない利用者も、PC 入力作業を取り入れたことで、集中して作業に取り組めるようになった。

買い物体験のレベルアップ

今年度から毎週水曜日の活動を社会体験とし、実際にお店に行って買い物体験をした。はじめはその日に食べるおやつを選んで買うことを行い、利用者によっては弁当コーナーに行き弁当を何個も買ってしまったり、買うまで動かなくなってしまうという行動も見られた。しかし、回数を重ねるごとに目的のものを買って支払いができるようになり、後半は役割分担をして買い物をしたり、できる利用者には予算内で買い物をしてもらったりと、全員が目的をもって買い物ができるようになった。

3. 成果

- ・個々の能力に合わせた作業体験を実施し、仕事に対する意識付けを強化することができた。
- ・目的を持った買い物体験を行うことができ、ただ好きなものを選んで買うだけでなく、役割をもって買い物を行うことができた。

4. 見えてきた課題

1日の平均利用者数の増加

全体的に個々の利用日数は増えてきているものの、曜日によって利用者数にばらつきがあり、極端に少ない曜日が見られる。主活動の内容見直しによって少ない曜日の利用者を増やし、平均利用者数の増加を目指す。

社会体験プログラムの拡充

今年度は実際のお店に行って買い物をし、決められたものを買うこと、商品を持ってレジに行き、支払いを済ませるという一連の流れを学ぶことを主に行った。今後は買い物体験以外の活動プログラムも考えていく。